

谷川徹三に継承された有島武郎の審美眼

杉 淵 洋 一

はじめに

1895（明治28）年5月に、愛知県知多郡常滑町保示^{ほうし}（現在の常滑市保示町）で生を受けた谷川徹三（1989（平成元）年9月、東京都杉並区の私邸において逝去）は、旧制愛知県立第五中学校（現在の愛知県立瑞陵高等学校）を卒業し、1913（大正2）年には上京して第一高等学校に入学している。そして、1918年、西田幾多郎に師事するために、京都帝国大学文学部哲学科に進学するまでの五年間を東京で過ごしている。

のちに日本の哲学界を牽引する人物の一人となる谷川は、自身の一高時代の暮らしぶりについて、「私は煩悶青年で、上信の山野や房総の海岸を放浪したり、寄席や芝居に呆けたように通ったり、無頼の生活を続けて」¹いたと振り返っている。しかし、そんな怠惰な日々を送っていたある日、偶然立ち寄った日本橋の丸善で、アメリカの詩人・ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman 1819-1892）の詩集『草の葉（*Leaves of grass*）』を手にしたことによって、谷川の生活は一変することになる。ホイットマンの詩作世界が生み出す力強いリズムに込められた生命の息吹によって谷川は、「善も悪も美も醜も、人間世界の否宇宙の一切の事象を肯定するその大きな肯定の精神に私は打たれ」²たという言葉を残している。この期せずしてのホイットマン詩との出会いは、宗教的に厳格であった自身の家庭環境³に起因すると考えていた、青年時代の谷川を苦しめた〈自己否定の精神〉による呪縛から解き放ち、

私は改めて哲学の勉強を一生の仕事にしようと決心し、毎日のように学校の図書館へ通って、手当たり次第にその方の書物を読んだ。（中略）そうして、私を永い間さいなみ続けた否定の精神の克服を自分にあかししようという思いをこめて、一高の校友会雑誌に

1 谷川徹三「思い出」『アルバム 有島武郎』日本近代文学館 1979, p. 1. ※1979年に筑摩書房より『有島武郎全集』の刊行を記念して開催された「有島武郎展」（主催：日本近代文学館、会期：11月1日～29日、会場：日本近代文学館展示ホール）のパンフレットに寄稿された文章の一部分。

2 谷川徹三「私の履歴書」同前, p. 33.

3 熱心に浄土真宗に帰依する家庭において、思春期に芽生えた性に対する問題意識は、極度の罪悪感を谷川にもたらし、自己嫌悪、自己否定の感情を抱かせることになった。※「わが道」（1970）『人間であること』毎日新聞社 1972, p. 55. 参照。

「否定・肯定」を書いたのである。私はそれを新しい出発の門出にしたつもりであった。⁴

と、自身が抱えていたネガティブな精神を止揚させ、将来に対してのポジティブな展望を持つ契機となっている。畢竟、二年の留年期間を含めて五年間にわたった一高における学生生活は、谷川の自己否定的な精神状態に終止符を打たせ、その後が続く半世紀以上の人生の在り方に啓示を与えた象徴的なエポックであったといえよう。

谷川が一高に在籍していた当時、時代の寵児として文壇に名を馳せる直前の有島武郎(1878-1923)が、東京市麹町区下六番町三番地の自宅において個人的に主宰した、ホイットマン詩集の題名に由来する〈草の葉会〉⁵なる、主に一高、東京帝大の学生達を対象としたサロンが存在していた。この〈草の葉会〉の発起人の一人であり、中心となって会を切り盛りしていた、のちに農業経済学者となる八木沢善次は、谷川のことを「熱心な会員」⁶の一人と評している。また、八木沢は谷川に一年先んじて、京都帝大に進学するために東京を離れているが、以降の〈草の葉会〉の様子について、「谷川君は最も熱心に通つたらしい」と書き残してもいる。谷川自身が、「八木澤君を除いては、恐らく私が最も熱心であつた。」⁷と自負していること等からも、谷川徹三の〈草の葉会〉へのたいへん熱心な参加、そして有島武郎への深い憧憬というものがある。

谷川がこの会に参加し始める時期は、本人の言葉によると、「恰度哲学をやらうと決め、その方の書物を手当たり次第に読んでゐたころ」⁸であつたとされ、谷川が前述の自己否定の精神による呪縛から解き放たれ、哲学の道で生きていくという確信を得た時期と軌を一にしている。このような意味において、谷川にとっての〈草の葉会〉の存在というものは、その後の谷川の思想と言動に大きな役割を担うものであつたといえよう。

そこで、本論考では、谷川の残した哲学の分野に留まらない美術史、美学、陶芸、映画、古美術等といった超領域的にわたる多彩な業績の出発点の一端を、〈草の葉会〉によって始まる有島武郎との交流に求め、有島の言動がどのような形で谷川の思想形成に対して本質的な影響を与えたのかについて、二人の交流をめぐる言説等から考察を試みたい。

谷川徹三についての研究は、弟子や知友達による回想録、谷川の著作への書評、批評等は相当数存するが、今日の我々が耳にする谷川の知名度や、その生前における膨大な仕事の量に比して、生前の仕事^{こんにち}を専門的に扱った先行研究文献は乏しい。管見の限り、谷川と中村稔の間で

4 谷川徹三「わが道」同前, p. 56. ※谷川の論文「否定・肯定」が掲載された『校友会雑誌』268号は、1917年11月に発行されている。

5 ホイットマン会とも呼ばれていた。※有島武郎「ポケット日記 一九一七年【訳】」『有島武郎全集 第十二巻』筑摩書房 1982, p. 550. など参照。

6 八木沢善次「有島先生と草の葉会」『有島武郎と場所』有島武郎研究会編・右文書院 1996, p. 227. ※初出: 「月報 六号」『有島武郎全集』新潮社版 1929.

7 谷川徹三「影響された書物」『展望』三笠書房 1935, p. 376. ※初出: 「週刊朝日」1933.

8 谷川徹三「影響された書物」同前, p. 337.

繰り広げられた宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」の解釈をめぐる論争について考察を加えた境忠一氏による論考「『(雨ニモ負ケズ)』論争序説」⁹、谷川の映画受容に関連させた牧野守氏による論文「哲学者谷川徹三における映画とその理論に就いて」¹⁰、篠木涼氏が立命館大学大学院に提出した学位(博士)論文¹¹等の論考が散発的に確認される程度といえる。同時代の哲学者、評論家達についての研究や、大卒の思想史等を扱う論考において谷川が論述の俎上となる例はしばしばみられるものの、谷川そのものの思想、活動を正面から研究した、所謂、〈谷川徹三研究〉といったものについては見つけることが出来ない。

また、有島武郎研究の方面から見ても、これまで、晩年の有島の人物像、作品を取り上げる論考の中で、〈草の葉会〉の名前が付随的に言及される事はあっても、この学生サロンの実態、またはサロンが形成した有島をめぐる人脈を中心に据えて分析をおこなったものは、今日に至るまで擱筆されていないのが実情であり、早急な〈谷川徹三研究〉の枠組み作りが肝要といえよう。

一、〈草の葉会〉への谷川徹三の参加

まず、谷川徹三と有島武郎とを結ぶ端緒を開いた、有島が主に一高、東京帝大の学生達を相手に開催していた〈草の葉会〉が誕生した事情と、谷川がこの会に参加した経緯について確認したい。

会の成立は、1917(大正6)年、有島武郎39歳、谷川徹三22歳の時に遡る。八木沢善治の回想によると、

大正六年の三月初私が御訪ねした時友達を連れて来てよいかと先生(=有島一執筆注)に御聴きしたら(中略)是非若い学生諸君と御会いしたいから連れて来るやうにとの御希望だつたので、私は早速一高の寄宿舎に帰つて其の夜遅く市河彦太郎——今は米国駐在の領事——に話し、翌日蠟山政道君——今の帝大法学部教授——に語つて賛成を得、更に当時私達の先輩として敬愛してゐた既に大学生であつた澤田謙君を誘つて、(中略)四人揃つて訪問し、夜の更くるのも知らず語つた時、ホキットマンの詩を一緒に読まうといふことになり、それが切つ掛けとなつて出来たのが草の葉会である。¹²

とされている。

9 『立正大学文学部論叢』第60号、1978、pp. 55-71.

10 『映像学』第31号、日本映像学会編 1985、pp. 2-8.

11 「初期映画理論の美学と倫理 中川重麗、ヒューゴー・ミュンスターバーグ、コンラート・ランゲ、谷川徹三」2008.

12 八木沢善次「有島先生と草の葉会」同前、pp. 225-226.

この証言と照らし合うようにして、晩年の有島が主に英語で記入していた「ポケット日記」の1917年3月以降の欄には、3月12日(月)「夜、ホイットマン」、19日(月)「夜、学生たちにホイットマンの講義」、4月23日(月)「夜、ホイットマンの講義」、5月23日(月)「夜、ホイットマン会。十時半まで話す。」¹³等、度々、〈草の葉会〉の開催を示す書き込みを見つけることができる。

八木沢が有島を訪ねた経緯に関しては、谷川によって、

八木澤君が昔から有島さんの「リビングストーン伝」の愛読者であり、また彼はそこから農業経済の方をやらうとしてゐたので、札幌の卒業論文に鎌倉時代の農政のことを書いた有島さんのところへその方のことでも訪ねたわけであつた。¹⁴

と書き残されている。

八木沢の回想によると、第一回目の〈草の葉会〉は3月12日の夕方から夜にかけて開催され、八木沢善治、市河彦太郎、蠟山政道、沢田謙、沢田輝武の一高生五名が麴町の有島邸に集い、有島が原書である英文のテキストを用いて、ホイットマンの「大道の歌 (*Song of the Open Road*)」を朗読したとされている。以後、この〈草の葉会〉は、有島の最晩年に至るまで、毎週月曜日の夜に定期的に開催されていくことになる。当初の主な参加者は、谷川徹三、蠟山政道、鶴見憲、八木沢善次、蘆野弘、沢田謙、原彪、藤沢親雄、北岡寿逸等で、遅れて野尻清彦(=大佛次郎一執筆者註)、橋爪健、芹沢光治良等が参会者となっている。¹⁵

会が誕生した要因の一つとして、有島は前年(1916年)の8月に妻の安子(享年27歳)を、11月には父の武(享年74歳)を立て続けに失っており、そのことによって有島が、強い精神的な喪失感に苛まれていたことが挙げられる。第一回目の〈草の葉会〉において、ホイットマンがエイブラハム・リンカーン大統領暗殺を悼んで詠った詩「死の歌 (*Death carol*)」を朗読する際の有島の様子は、

その時は、夫人を失ひ、間もなく父君に別れた直後であつた故か、(中略)先生は眼に涙を一杯うませてもられた。そしてしまひには読むに堪へなくなつて最後の章を読まずにしまはれた。¹⁶

13 有島武郎「ポケット日記 一九一七年【訳】」『有島武郎全集 第十二巻』筑摩書房 1982, pp. 544-550.

14 谷川徹三「影響された書物」同前, p. 378. ※有島の札幌農学校で提出した卒業論文については、有島武郎「鎌倉幕府初代の農政」『有島武郎全集 第一巻』筑摩書房 1980, pp. 221-291. 参照。

15 『有島武郎全集 別巻』筑摩書房 1988, p. 148. ※大仏次郎が1964年に日本経済新聞に連載した『私の履歴書』の中で、この〈草の葉会〉を振り返る際に、清野暢一郎、和田日出吉とともに、「今の法政大総長」として谷川徹三の名前を見つけることができる。

16 八木沢善次「有島先生と草の葉会」同前, p. 227.

とされている。

この頃の有島の作品、手紙、及び周辺の人物達によって記された文章から浮かび上がってくる有島の姿は、肉親の死によって生じた孤独感や悲壮感といったものが至るところに表出しているものが多々見受けられる。〈草の葉会〉の開催には、このようなネガティブな感情を断ち切り、日常的な精神状態を取り戻したいという、有島の個人的な願いが少なからず働いていたと考えられる。

そのような経緯で誕生することになった〈草の葉会〉であったので、学術的な意味における講義を学生達に施すことよりも、有島が会における学生達との交歓を楽しみにしていた側面が強く見受けられる。

この点については、谷川が、「(有島によるホイットマンの一執筆者註) 詩の講読がすんでから、みんなでお茶をのみながら話すのが面白かった。よく十一時過ぎになつたものである。」¹⁷と述べ、芹沢光治良も、「講義も楽しかったが、講義のあとで、茶菓のご馳走になりながら、一、二時間座談を聴くことが、講義以上に、私には有益であった。」¹⁸と回想しているように、〈草の葉会〉の多くの参加者達が共通して、会名の由来となったホイットマン詩の講読のことよりも、その後の有島を交えた座談や談話の方に強く印象が残っていることなどからも理解することができよう。

では、一高生であった谷川徹三は、どのようにして〈草の葉会〉への参加を開始しているのだろうか。そのことについて、谷川は以下のように述懐している。

丁度私が「草の葉」をはじめて読んでまもなくであつた。友人の一人から、大学と高等学校へ行つてゐる者達数人が毎月曜日、有島さんのところで「草の葉」を読んでもらつてゐるといふ話をきいた。有島さんがまだ文壇へ出ない前で、「白樺」で名前だけは知つてゐたが、作品をよんだこともなかつた。しかし有島生馬氏の兄さんで——生馬氏のものはそのころすでによんでゐた——大変いい人だといふし、それにホイットマンをもつとしつかり読みたいと思つてゐた際なので、私もその仲間へ入れてもらふことにした。今外務省にゐる市河彦太郎と中央大学にゐる八木澤善次とに連れられて行つたと思ふ。¹⁹

このように、谷川は有島武郎という人間に対してほとんど予備知識を持たないままに、ホイットマンの詩への純粋な興味から接近していったのである。谷川は、八木沢善治を通じて有島との邂逅を果たしている。その際の様子は八木沢によって、

17 谷川徹三「影響された書物」同前, p. 378.

18 芹沢光治良「私の青春時代」『人生について・結婚について』新潮社 1967, p. 180.

19 谷川徹三「影響された書物」同前, p. 378.

谷川徹三君が仲間入りを希望したので或夜一高の校門のところで谷川君と美術史の今は権威となられた相良徳蔵君と一緒にたつて謂はゞ私の紹介といふ訳で草の葉会に行き、それ以来谷川君は熱心な会員となつた。²⁰

と語られている。

谷川は、〈草の葉会〉に足繁く通っていた頃の有島に対して自身が抱いていた思いについて、

そのころ、私が有島さんからうけた感化は相当大きかつた。市河君や八木澤君などと話す時、先生といへば有島さんのことにきまつてゐた。(中略)人間としてはそのころ私の接した人で私を最も牽きつけてゐた。²¹

と書き留めている。また、〈草の葉会〉への谷川の参加以降、有島の日記には、谷川の名前がしばしば登場し、二人が頻繁に顔を合わせていたことを確認することができるので、会を通じて、二人の間の距離が急速に縮まり、師弟としての親密な関係が形成されていったことが想像されよう。

このことについては以下の、

「草の葉会」では青年の客気からよく先生に喰つてもかゝつたが、しかし私は心から先生を先生と呼んだ。後年先生の芸術に対して或種の不満をもつやうになつてからも先生の人間に対する信頼と尊敬とにはすこしもかはりはなかつた。²²

という文章からもうかがい知ることができる。

芹沢光治良も同様に、〈草の葉会〉で有島の講義を聴いていたことに触れながら、「有島武郎先生は、私が小説家の先生だと心で敬っているただ一人の日本人である。』²³という言葉、後年になって書かれる「私のただ一人の先生」なる文章の中で残している。このように、有島は〈草の葉会〉に参加していた多くの学生達から神聖視、特権化される存在であったのである。

谷川は、有島との初めての出会いから一年と経っていない翌1918年の秋には、京都帝国大学の文学部哲学科に進学するために、東京、つまり有島のもとを離れなければならない。しかしながら谷川が、

²⁰ 八木澤善次「有島先生と草の葉会」同前, p. 227.

²¹ 谷川徹三「影響された書物」同前, p. 379.

²² 谷川徹三「私の履歴書」『自伝抄』中央公論社 1989, p. 36. ※初出は、『日本経済新聞』1967.

²³ 芹沢光治良「私のただ一人の先生」『アルバム 有島武郎』同前, p. 4.

私はその後親炙して、有島さんに劣らず影響を受け、それぞれ先生同様生涯の恩人と考えている志賀直哉さんにも、柳宗悦さんにも、和辻哲郎さんにも、先生という言葉は使わなかったが、有島さんには、出会いが私の高等学校の頃であったこともあり、終始先生と呼んでいた。²⁴

と振り返っていることは、一高生時代の〈草の葉会〉が契機となって、他の恩師、恩人達へとは温度差のある、より深い畏敬の念を有島に対して抱いていたことを如実に物語る一つの証左といえるであろう。

二、参加者達の証言から浮かび上がる〈草の葉会〉

ここからは、〈草の葉会〉においては一体どのような内容の座談、放談が行われていて、それが谷川徹三にとっては、どのような意味を持っていたのかについて考察を進めていきたい。

谷川君は大正七年秋京都の文科に行かれたが、その頃から草の葉会は会員の数が非常に殖えたが、しかしそれと同時にホキットマン研究会でなくなり、雑談の会、謂はば先生を中心とした若い学生の集まりと化し、最初の会員は殆んど顔を見せなくなつてゐたやうである。先生自身も「草の葉会もすつかり変つてしまつた」と寂しさうに告白せられた。²⁵

と、谷川に一年先んじて京都帝大の学徒となっていた八木沢が証言するように、谷川が京都帝大に入学した1918年秋以降は、〈草の葉会〉結成時の目的であった、ホイットマン詩集『草の葉』の講読や講義は影を潜め、有島を囲んでの雑談の会となり、主な初期の会員達は会から手を引いている。

しかしその一方で有島は、京都に転出した谷川、(谷川と同じ宿に下宿していた)八木沢二氏との交流を、手紙の遣り取りなどを通して続けていたことが知られている。このような事実に加えて、1918年秋より有島は、毎年、春と秋に各八回という約束で、同志社大学へ英文科講師として出講しており、講義のために京都、奈良に滞在した折には、谷川、八木沢、沢田謙ら〈草の葉会〉初期のOBメンバー等とともに散策をしたり、定宿であった旅館・あかまん屋等において、かつての〈草の葉会〉で繰り広げられたような放談の場を持つ機会を設けている。この時期、谷川は所属する哲学科において学友であった三木清に有島を引き合わせていること等も確認することができる。²⁶

²⁴ 谷川徹三「思い出」同前, p. 1.

²⁵ 八木澤善次「有島先生と草の葉会」同前, p. 228.

²⁶ 三木清「読書遍歴」『三木清全集 第一巻』岩波書店 1966, p. 402. 参照。

谷川は〈草の葉会〉の開催内容について、

この読書会では、初めに一、二時間先生に、(中略)『草の葉』を訳読してもらおうと、あとは政治の問題、経済の問題、文化の問題と、いろいろな問題について雑談をかわすのが常で、もちろん有島さん中心ではあったけれど、東大、一高の弁論部の連中が主で、論客が多かったから、しばしば白熱した議論になった。²⁷

と残している。

また、同じ文献の別の箇所においては、有島の英文テキスト『草の葉』の朗読、日本語への翻訳が終わった後の会の様子が以下のように記されている。

初め一時間か一時間半、『草の葉』を先生に読んで訳してもらって、あとは自由な放談をするのである。文学、美術、歴史、哲学、政治、経済とあらゆる方面のことが話題となったが、そこで私はギルドということばを覚えたり、クロポトキンの人と著書に初めて興味を感じたり、無政府主義や社会の幾つかの傾向を教えられたりした。そういう方面の書物を私はそれまでまるで知らなかったからである。²⁸

〈クロポトキン〉、〈無政府主義〉等の言葉から、当時の有島のアナーキズムへの傾倒を知ることができよう。同じく会員であった大佛次郎も、「草の葉会の話題が、文学のことよりも社会問題の話が多かったのは、当時の動揺した社会情勢を反映して」おり、「法科、政治学科の学生の発言が多かったようで、文学派はおとなしく聞き手に廻っていた。」²⁹と回顧していることなどからも、〈草の葉会〉における多岐の領域にわたる話題と議論が、谷川の社会や学問に対する眼というものの形成に大きく寄与したことは、その後の谷川が歩いた、超領域的な人間としての経歴や文筆活動などからも明らかなるであろう。

谷川が後年、「特に、人間の生き方の問題についてくりかえし真剣に話し合った。」³⁰と振り返っているように、ホイットマン講読が終わった後の〈草の葉会〉は、有島を囲んだ本邦の未来を担う次世代のエリート青年達にとって、所謂、時事放談的な空間であると同時に、人間の生きる意味についての濃厚な議論を交わす、精神的なビルディング(成長)の場としての機能を担っていたといえる。

また、欧米において流行している書籍の、学生達への紹介を兼ねた講読の時間について谷

27 谷川徹三「私の履歴書」『自伝抄』中央公論社 1989, p. 36. ※初出は、『日本経済新聞』1967.

28 谷川徹三「私の履歴書」同前, p. 36.

29 大仏次郎「私の履歴書」同前, p. 46.

30 谷川徹三「いろいろな思い出」『愛ある眼』谷川俊太郎編・淡交社 2001, p. 70.

川は、

ベルグソンの自由意志論について有島さんのいつたことが、ベルグソンのいつてゐることと少少違つてゐたのなどを訂正したり、今から思ひ出すと冷汗の出るやうなことがいくつもあ（った）³¹

としており、その解釈をめぐって侃侃諤諤の議論を交わしていたことがうかがわれる。

大佛は、〈草の葉会〉が行われていた「洋間で棚に原書がずらりと並んだ書齋」³²のことを思い出しながら、

有島さんがスティルナーの著書を教えてくれたし、クロポトキンやバクーニンのことが話題になった。マルクスはまだ資本論の翻訳も出ていなかったが、各種の紹介で知られていた。私もバートランド・ラッセルの「自由への道」を神田の中西屋でみつけて買って愛読した。³³

と書き残している。

ここに言及されている人名、書名は、有島最晩年の思想（特に1920年に上梓された有島の人生集大成の評論といわれる『惜みなく愛は奪ふ』）に、その思想や内容が色濃く反映されているものであり、有島が、この〈草の葉会〉における学生との座談、放談を通じて、学生達と意見を交わしながら舶来の思想書を積極的に翻訳、読解し、自身の思想として血肉化させていったことを汲み取ることができよう。

1919年の『中央文学』4月号収載の「余の愛読書と其れより受けた感銘」なるアンケートに有島は応えて、〈草の葉会〉において議論の俎上に載せられた事を確認することができる「〈クロポトキン諸作〉よりは正しき生活を」、「〈ホキットマン詩集〉よりは性格の力を」、「〈ベルグソン「時間と意志の自由と」〉よりはよき考え方を学びました。」³⁴と回答していることなどからも、有島における西洋思想の受容に〈草の葉会〉が与えた影響が相当なものであったことを推断することができる。

有島の死後には、谷川も晩年の有島の裡なる「不吉な暗い影」³⁵には遅ればせながら気付くことになるのであるが、芹沢光治良は、

31 谷川徹三「影響された書物」同前, p. 379.

32 大仏次郎「私の履歴書」同前, p. 46.

33 大仏次郎「私の履歴書」同前, p. 46.

34 有島武郎「余の愛読書と其れより受けたる感銘」『有島武郎全集』筑摩書房 1980, p. 348.

35 谷川徹三「古美術十話」(1965)『人間であること』毎日新聞社 1972, p. 178.

私はいつも空腹で草の葉会に出たが、先生のそうした（＝北海道の私有農地の小作人への無償解放に関連して生じる家族との不和などに深く悩んでいる一執筆者註）話に、感動して、胸を熱くしながら、番町から本郷の弥生町まで、仲間と夜おそく歩いて帰ったものだ。³⁶

と、〈草の葉会〉における若者達の時間を忘れるほどにほとぼしる熱気を書き留める一方で、「私は草の葉会で、有島先生の苦悶を観て、不遜にも、先生が苦しんでいるのは、社会学や経済学の知識が欠けているからではなかろうかと、秘かに疑った。」³⁷と、所有する財産の処理（放棄）の問題においては、社会学や経済学の知識の乏しさが原因で、有島が家族と小作人の間に板挟みにさせられていて、それが、会の開催中に時折垣間見せる苦悶の表情（＝「不吉な暗い影」）に結びついているとして、有島の実学の方面における能力について懐疑の眼を向けている。

肉親を立て続けに失った喪失感が、当時の有島の表情に暗い影を落としていたことに加えて、父・武の死によって長男である有島は、有島家の家長を務めなければならない立場に立たされていた。そのような状況の中で、有島は1922年7月、自己の理想の実現ために始めていた財産放棄の一環として、北海道に所有していた全農地400町歩の小作人への無償解放を決行している。

このことについて芹沢は、有島が〈草の葉会〉の中で、

先生はその頃、すでに私有財産制度に疑問をもち、北海道の農地を小作人に無償で解放しようかと、迷っていた。（中略）母堂が存命中であるから、親からゆずられた財産を放棄できないが、母堂がなくなったら、「諸君が有意義だと考える方法で使ってください」とまで、真剣に語られたこともある。³⁸

と振り返っている。

しかし、有島は、母・幸子^{ゆきこ}の死を待つことなく、北海道の所有農地の小作人達への解放を強行してしまうのである。この有島の行為は、有島と母親の間に抜き差しならない確執をもたらす結果となり、更なる精神的な袋小路へと有島は追い込まれてしまうことになる。

山崎英文氏が、

有島武郎の農場解放は、思想と現実の矛盾の解決（中略）のための一手段であったが、

³⁶ 芹沢光治良「私の青春時代」『人生について・結婚について』新潮社 1974, p. 181.

³⁷ 芹沢光治良「私の青春時代」同前, p. 184.

³⁸ 芹沢光治良「私の青春時代」同前, pp. 180-181.

様々な理由から渋滞を重ね、生前その理想の実現をみなかった。それは（中略）農場処理につき自己の思想にもとづく反体制的理想農団の夢まで寄せてしまったため、資本主義社会の現実にはばまれることとなった³⁹

と、空想社会主義的傾向を持つ有島の思想には、物理的な限界があったことを的確に指摘している。

一高生であった当時の芹沢の視点からの有島の社会学、経済学領域における知識不足を難じる言説、谷川が有島のベルクソン思想のミスリーディングを鋭く指摘している点、有島が京都在住の札幌農学校教員時代の教え子であった大島豊宛てに、谷川が有島の誤訳に気づき、有島がその誤訳を自らのミスと認めている趣旨の手紙⁴⁰を送っていること等に鑑みれば、〈草の葉会〉に参加していた一部の学生達においては、共通の認識として、有島の学問的な素養、能力の限界について、ある程度の判断が下されていたことがうかがわれる。

しかしながら、その有島の限界点に気がついていた一人である芹沢自身が、有島という人間を文学で慕っている唯一人の日本人の〈先生〉と断言し、谷川徹三が、親炙に浴したとする有島、和辻哲郎、柳宗悦、志賀直哉の四人の中で唯一人、有島のことだけを〈先生〉という呼称をもって呼んでいたと、有島を恩師の中でも格別に敬仰していたという事実は一体何を意味するのであろうか。

実学的な成功を至上とする資本主義経済的な立場に立つならば、実利の望めない部署に大きく投資する精神的傾向の著しい有島の行き詰まりは、すでに多くの同時代の知識人達によって見透かされていたといえよう。しかし、先の山崎氏が、有島の農場解放における試みが失敗に帰したことを認めつつも、「大正時代の一知識人が時代を深く洞察した行為であり、その自己の思想を貫こうという純粹さ、自己の思想への誠実さにおいて高く評価されるべき」⁴¹として論考を結んでいるように、有島の行いは人間的、つまり人道的行為の一つの実践として、多くの同時代の共感者、理解者を産んだことも、また事実であったのである。

有島は、評論『惜みなく愛は奪ふ』において、一般社会の基調が、知識と道徳から生み出されることを称賛する〈インテレクチュエル・ライフ智的生活〉という生活の様式におかれているが、その上位の生活として、「外界の刺激によらず、自己必然の衝動によって自分の生活を開始する」⁴²〈インパルシヴ・ライフ本能的生活〉

39 山崎英文「有島武郎と農場解放」『有島武郎と社会』有島武郎研究会編・右文書院 1995, pp. 168-169.

40 有島武郎「大島豊宛書簡（1919年5月28日付）」『有島武郎全集 第十四巻』筑摩書房 1985, p. 67. ※「谷川君の発見した僕の誤訳をさも自分一人の発見の如く申出られた事 是は可なり不快を僕に与へた あの時「谷川君もいつてゐたが」位な事は申添へられても可然ものと思ふ あゝいふ態度は僕が一番嫌ひな態度だ 顧みて君が病ましくなければそれでいゝが少しでも知つたか振りを發揮したいといふ自責を感じたら以後は絶対にあれをやめなければ君は成長出来ない」とある。

41 山崎英文「有島武郎と農場解放」同前, p. 169.

42 有島武郎「惜みなく愛は奪ふ」『有島武郎全集 第八巻』筑摩書房 1980, p. 157.

が存在していることを提言している。有島にとってこの本能的な生活とは、〈愛〉を基調とする生活であるがゆえに、愛が全うされた時に、「自滅するものの個性は、死の瞬間に最上の生長に達している」⁴³ということとされる。

このような有島が主張する論理展開を全面肯定的に受け入れるとするならば、有島は1923年6月の波多野秋子との心中によって、自身が最も崇高な生活の基調をなす生活と信じる〈本能的な生活〉に殉じたと見ることも許されるのではないだろうか。

この思想と行動の透明性、一貫性こそが、青年時代の「人生に対する数々の疑惑のために落ち着かない暗い日」⁴⁴に対して、「有島さんのあたたかい、思いやりのある、静かな人柄は一つの支え」⁴⁵となったと谷川が吐露し、有島の盟友・鶴見祐輔に、「純粹な、晴朗な気持ちが、有島君の身边から、放散してゐるようで、会って話しをしていると、「私はなんとなく自分の心を洗ひ清められるやうな感じを持ちました」⁴⁶と言わしめ、大佛次郎が、「誠実な人だと、一度でわかるような声」⁴⁷と振り返るように、有島のもとに集った人々が口を揃えた、有島武郎という人間が醸し出していた強い魅力の核心であったといえるのではないだろうか。

三、谷川徹三が有島武郎と〈草の葉会〉から学んだこと

(一)、有島武郎の〈対象〉への審美眼を受容する谷川徹三

それではここで、〈草の葉会〉のメンバーや関係者達によって、概ね清廉潔癖な人物として高く評されていた有島から、谷川徹三は何を学んだのか、谷川の言説を中心に、その核心へと迫っていきたい。

まず、谷川が親しく接した(有島、和辻、志賀、柳という)四人の先輩の中で、有島のことだけを〈先生〉と特権化して呼んでいた点に注目してみたい。谷川は自著の中で、この四人の先輩から受けた大きな影響について以下のように語っている。

この四人の先輩からは、人間的にも物の考え方のうえでも、いろいろの影響を受けており、この人たちを除外して私の人生は考えられないほどである。(中略)古美術の世界に私の眼をひらいてくれた人としては、この四人をまず数えなければならない。⁴⁸

43 有島武郎「惜みなく愛は奪ふ」同前, p. 184.

44 谷川徹三「古美術十話」同前, p. 177.

45 谷川徹三「古美術十話」同前, pp. 177-178.

46 鶴見祐輔「有島武郎君を想ふ」『有島武郎とキリスト教』有島武郎研究会編・右文書院 1995, p. 256. ※「月報」第5号『有島武郎全集』新潮社 1929からの転載。冒頭に、有島の七周忌に際し、「朝日講堂に於ける記念講演会に寄せられたものである(编者)」とある。

47 大仏次郎「私の履歴書」同前, p. 47.

48 谷川徹三「古美術十話」同前, p. 176.

その中でも、谷川の「美の秘密に私の眼をひらいてくれたの」⁴⁹は、まさしく有島が口にした言葉によるものであったのである。谷川は、有島の言葉によって自身が、古美術、即ち、実作品（対象）としての芸術の世界に開眼するきっかけとなったとする決定的な出来事について、具体的な例を二つ挙げている。

一つ目の例は、1919年、有島が同志社大学での特別講義における講師を務めるために京都に逗留し、谷川、八木沢、三木清を伴って京都の郊外を探索した際に、

石清水八幡宮の参道の石段を上りながら、有島さんが、その石段の傾斜度と一段一段の高さと、段から段に至る距離とが、人間の歩幅にいかにもよく合っていて、実に上りいいことを、しきりに力説し、近代の土木建築の技術的進歩にもかかわらず、こういう点の顧慮が払われていないことを嘆かれた。それ以前にも有島さんは、醍醐への遠足のさい、法界寺の屋根の美しさをしきりにほめたたえて、専ら堂内の壁画だけに心を奪われていた私の眼を開いてくださったが、この石清水の石段については、なるほどものはそういうふうに見るものかとおもったので、その後折あるごとに思い出した。⁵⁰

とする、有島の石清水八幡宮の石段への眼差しに対してである。

そしてもう一つは、1919年11月7日に、和辻哲郎の『古寺巡礼』を携えて、奈良を一週間ほど周遊していた⁵¹有島から、谷川と八木沢の二人の許に一枚の葉書が送られた際のことであり、当該の葉書には、「博物館にて推古期の（百済一執筆者註）観音像を見、一見恋着、その堂守にするといはば一生を投じても惜しからじとさへ思ひ申候」⁵²という文言が添えられていた。

のちにアンドレ・マルローが来日して法隆寺を訪れた際、この百済観音像を目の当たりにして、

たぐいなく見事な顔容を含むこの全体像は、そのままにして一個の《エレマンテール》（要素的なもの）と化している。そしてその意味で、まったき《サクレ》（聖なるもの一執筆者註）の表白としての中世フランスの黒聖母像と比肩する響きを持つ。この響きは、いささかの蛮性と極度の繊細味とが、かくも激しい力をもってぶつかりあうところから生じている。私は、このように拮抗する力からしか真の芸術的衝撃を受けることがない⁵³

49 谷川徹三「私の履歴書」同前、p. 44.

50 谷川徹三「古美術十話」同前、p. 177.

51 谷川徹三の書評「和辻哲郎『古寺巡礼』」『一冊の本 全』朝日新聞学芸部編 1967, p. 530. を参照。

52 有島武郎『有島武郎全集 第十三巻』筑摩書房 1984, p. 644.

53 竹本忠雄「アマテラスの道」『マルローとの対話 日本美の発見』人文書院 1996, p. 207.

と絶賛したことで知られる（、有島が鑑賞した当時は、法隆寺から寄託されて旧帝国奈良博物館（現在の奈良国立博物館）に展示されていた）百済観音像への恋着を訴える有島について谷川は、

仏像というものが、現代においてもそんなに肉体的ともいってよい恋着の対象になるということである。それまでも私は奈良の仏寺仏像を見てはいた。しかしそれは、専ら文化史的知識の対象としてであった。美しいとは思っても、自分の現在の生活とは遠い、どこかよそよそしいものとしてであった。それなのに、先生には、仏像が肉体的に生活の中に入り込んでいる。（中略）それによって私は、美の秘密というものに大きく眼を開かれたのである。⁵⁴

と語っている。有島の対象（造形物）への繊細な美的感覚、審美眼の鋭さに驚嘆するとともに、有島の言葉そのものが、谷川の対象への〈美〉を解する能力を開く要因となっていることを、この文章からは読み取ることができよう。

しかしながら、谷川が、「もっとも、正確には私の眼をひらくきっかけをつくってくれたというのが本当」⁵⁵であるとするように、この有島が持つ対象への審美眼が谷川のもとに伝授されたこと、実感を持って谷川本人に理解されるまでには今しばらくの歳月の経過を待たねばならず、当時の谷川は、「その葉書ももらってから二、三日後、私達は有島さんに呼ばれて奈良へゆき、その推古期の百済観音を見ても、一向それほどのものに思えなかった」⁵⁶、「私には、先生がそんなに恋着したという理由が十分納得いかなかった。」⁵⁷と、奈良博物館に展示されていた百済観音像に有島が寄せた思いを理解することが出来てはいなかったのである。

谷川は、有島の裡に見た「仏像が肉体的に生活の中に入り込んでいる」という精神の状態を、三十歳⁵⁸、四十歳⁵⁹を超えた頃になってようやく体得できるようになったと、のちになって語っている。1923年に谷川は、対象への〈美〉を見る眼を開かせたくれた有島を永遠に失うことになるが、その喪失を補うかのようにして、以降は、和辻、志賀、柳という三人の別の先輩から、対象への〈美〉を見る眼を学んでいくことになるのである。

また、この三人から学んだ対象への〈美〉を見る眼には質的な違いが認められる。

54 谷川徹三「古美術十話」同前、p. 178.

55 谷川徹三「私の履歴書」同前、p. 44.

56 谷川徹三「和辻哲郎『古寺巡礼』」同前、pp. 530-531.

57 谷川徹三「古美術十話」同前、p. 179.

58 谷川徹三「古美術十話」同前、p. 178. には、「これは人間三十を越えなければ、本当にはわからない感情であることを、その後私はしった」とある。

59 前述の「和辻哲郎『古寺巡礼』（谷川徹三）」、p. 530. では、「人間四十を越さないと本当には分からぬ仏像に対するこういう恋着をまだ解することができなかつた」としている。

和辻哲郎からは、

大正十四年京都大学に赴任して来られて以来、私は和辻さんに親炙し、その随所にイデーを見る眼に——つまり現象の多様性の中にただちに物の本質を見抜く眼に——常に啓発されてきた。⁶⁰

と、(和辻が哲学者であったためでもあろうが、) 極めて哲学的、形而上学的な視点からのアプローチで啓発されたとして、谷川自身は和辻からの影響を解釈している。

1923年3月、我孫子から京都・粟田口三条坊への転居を機に、谷川と交際が始まった志賀直哉に関しては、「庭(、殊に志賀が美術書『座右宝』で語っている龍安寺の庭—執筆者註)を教わり」⁶¹、それが谷川の日本庭園についての美学の試論の執筆につながったとして、志賀のことを常に対象の〈美〉の真髄を的確に把握しうる人間として高く評価している。

その志賀から紹介された柳宗悦については、谷川の骨董屋通いを促した人物とされ、柳が押し進めた民芸の運動等を通じて、お互いの親交を深めていったのであるが、焼き物の趣味に関しては方向性に違いがみられ、その部分では袂を分かつことになってしまっている。しかしながら、柳の審美眼について、谷川は総じて敬意を払っていたとされる。柳を介した民芸運動へのかかわりは、その後の谷川を、日本陶芸倶楽部初代理事長、日本芸術院会員等、美術の世界における重要な役職に就かせるとともに、骨董品の収集家、陶芸の実作者として谷川徹三の名を後世に留めることに大きな役割を果たしており、柳は谷川にとって必要不可欠な後見人であったといえる。このようにして、和辻、志賀、柳の三人が、有島の後塵を拝して、谷川を古美術の世界の奥深いところに誘^{いざな}っていったのである。

そういった意味で、〈草の葉会〉に端を発する有島と谷川の交流は、後年になって体得される谷川の「対象への〈美〉を見る眼(審美眼)」の原風景を有島の「対象への〈美〉を見る眼」を通して与え、谷川が「〈美〉の伝道者」としての道を歩むことになる起爆装置のような役割を潜在的に果たしていたといえよう。有島の持つ美的感覚の谷川への影響は根源的なものであり、そこに和辻、志賀、柳の三人がそれぞれ所有する「対象への〈美〉を見る眼」が発展的に統合されながら付与されていった結果が、〈美〉に対する極めて繊細、かつユニークな眼(意識)を持った思想家、批評家としての谷川徹三の姿であるといえよう。

(二)、審美眼の媒介者としての有島武郎

有島の対象物の中に〈美〉を見出す眼、所謂、〈審美眼〉に、繊細で独特な印象を肯定的なものとして抱かされたのは、なにも谷川徹三ひとりだけに限定されるものではなかった。

⁶⁰ 谷川徹三「古美術十話」同前、pp. 180-181.

⁶¹ 谷川徹三「古美術十話」同前、p. 180.

大佛次郎は、

旧東海道の程ヶ谷駅に藁屋根の家が多く、屋根の棟に、いちはずや、あやめを植えてあるのに、花がたくさん咲いていた。昔のひとは実にゆかしいことをしたものですな、と汽車の窓からその花を見て有島さんが私に言った。⁶²

と、藁屋根に咲く花々に古の人々のゆかしさをみてとる直観的な言動の中に、有島の人としての感受性の鋭さを認めている。

また、有島にとって札幌農学校以来の刎頸の友であった森本厚吉は、有島が生垣の落葉松の芽生えを森本に指摘した際に、有島が落涙しながら、「これは綺麗だ！こんな綺麗なものは東京にはない。札幌でもこんな美しいものは見たことはない。」⁶³と歓喜した学生時代の一場面等について回想しながら、

彼は詩人である。彼はわれわれの見ぬものを見た。ワーズワースは路傍の花を見て泣いたが、われわれは英国に行かずとも現実に有島君の尊い品性にふれることが出来た⁶⁴

と、イギリス・ロマン派の象徴的存在である田園詩人・ウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth 1770-1850) の美的感受性の強さに匹敵する感受性を所有する存在として、有島という人間が持つ品性の廉直さを礼賛している。

また、有島の代表作である『或る女』についても、

或る女のモデルを佐々木^{ママ} (= 佐々城) 信子とその夫達や信子の妹達と房州で一夜を過ごしたことがある。其後私の家の北向の書齋で書き始めたが私には只一片の何等つまらぬことが彼の傑作の一つとなつた⁶⁵

と述べる等、再三にわたって森本は、有島の自然美に対する感覚の鋭さと、芸術家としての想像力の豊かさ（再現力の巧みさ）について言及している。

ワーズワースは「詩作の本分」を、

対象をどのように扱うのかではなく、どのように見えるかである、つまり、どのように

⁶² 大仏次郎「私の履歴書」同前, p. 47.

⁶³ 森本厚吉「純真の人有島武郎」『有島武郎とキリスト教』有島武郎研究会編・右文書院 1995, pp. 266-267. 初出：『北大文芸』第14冊「有島武郎記念号」北海道帝国大学文学部 1929.

⁶⁴ 森本厚吉「純真の人有島武郎」同前, p. 267.

⁶⁵ 森本厚吉「純真の人有島武郎」同前, p. 267.

存在しているのかではなく、感覚と情熱に対して、どのように存在して見えるかということ⁶⁶

と定義する。

ここには、ニーチェの言葉でいうところの「悲劇的なものに対する形而上学的な歓喜」⁶⁷であるディオニュソス的な方法、つまり、〈否定〉的な要素の中から〈肯定〉的な結論を導き出すといった逆説的^{パラドクサル}な方法による対象への接近は見られず、感情と情熱に訴えるものを、そのまま素直^{ダイレクト}（直接的）に汲み取る、「現象の永遠性のかげやかなしい賛美によって個体の苦悩を超克するのであり、ここでは美が生^{ダイレクト}のつきものの苦悩に打ち勝つ」⁶⁸アポロ的な、ワーズワースの詩作へのパースペクティヴを見て取ることができる。

フランスの哲学者・ジル・ドゥルーズはホイットマンの詩の特徴を、「アフォルスムや分離によって定義されるものではない。そうではなく、それは隔たりを調整する特殊なタイプ^{ダイレクト}の文によって定義される」⁶⁹「断片的エクリチュール」にあるとしている。そして、この「断片的エクリチュール」とは、

文を組み立て、文をしてみずからに立ち戻ることのできる一つの全体性たらしめる統辞法が、伸縮したり空間的一時的な隔たりとしてのダッシュを生やしたりする、そんな無限の非統辞的な文を放出しながら、消滅しようとしているかのようだ。そして、あるときはそれは事を列挙するその場かぎりの文、カタログ化しようとする事例の列挙であり（入院中の怪我人たち、ある場所の木々）、あるときは、隊列を作る文、相あるいは瞬間のプロトコールのようなものである（戦闘、家畜のコンベヤー、後から後から続いてくるマルハナバチの群れ）。⁷⁰

としている。

つまり、ドゥルーズが解釈するところのホイットマン詩は、詩人の視覚に訴える対象を、ありのまま、ないしは、ある法則に従ってありのままに列挙、カタログ化し、一つの全体性を獲得する作業によって生み出されるアポロ的^{ダイレクト}（直接的）なエクリチュールであり、ワーズワース

⁶⁶ Wordsworth, *Essay, supplementary to the preface*, *Wordsworth's poetical works II*, edited by E. de Selincourt, Oxford, 1952, p. 410. ワーズワース「補遺」『抒情民謡集序文』1815. ※日本語訳は執筆者による。原文は以下の通り、<The appropriate business of poetry (...) is to treat of things not as they are, but as they appear, not as they exist in themselves, but as they seem to exist to the senses, and to the passions.>

⁶⁷ フリードリヒ・ニーチェ「音楽と悲劇的神話」『悲劇の誕生』岩波文庫 1966, p. 181.

⁶⁸ フリードリヒ・ニーチェ「音楽と悲劇的神話」同前, pp. 181-182.

⁶⁹ ジル・ドゥルーズ「ホイットマン」『批評と臨床』河出書房新社 2002, p. 122.

⁷⁰ ジル・ドゥルーズ「ホイットマン」同前, p. 122.

が定義するところの「詩作の本文」が指示する内容との通底をみてとることができよう。

また、安齋芳氏はホイットマンについて、

自然の力で生え出た植物を見れば、そこに神の姿を見つけ、動物や鳥をみればそれらの充足しきっている完全な姿を羨み、人間を歌えば人間を神格化してしまうように、地球上のあらゆるものの影に神が存在していることを唱えた。⁷¹

と指摘している。ここで指摘されるようなホイットマン詩に表出する汎神論的な傾向と相通じる部分も、ワーズワースの対象に向けた美意識の中には見出すことができる。

有島はホイットマンを、「彼は決してセンチメンタルではなかつた」、「彼はいつでも偏見なしに、物にぶつかつて行きました。そして其処に、愛すべきものがあれば、心を極めて此を愛し、憎むべきものがあれば、恐るゝ事なくこれを憎」⁷²んだ、対象へのアポロ的な（直接的、直情的な表現を好む）心的傾向を持った人物として、この詩人の持つ感性を「個性の自由なる表現への触覚」⁷³と呼んでいる。

そして有島は、ホイットマンがこの能力を発動させることによって、対象の奥底に隠れている神秘を把握し、詩の実作の段階に至って、この把握された神秘が、（ホイットマンの「有する言葉がどれ程、内的な生命によつて力づけられてあるかといふ事を、語る良い例証の一つ」として）「簡単な手法によつて描き出される事象は宛ら彫刻の様な立体的な感じと確実な面とをもつて、ハッキリ描き出されてゐる」⁷⁴のであると、アポロ的な能力に基づいた、ホイットマンの対象に潜む〈神秘〉をとらえる感覚の鋭敏さと、その〈神秘〉の詩作世界内における再構成（再構築）能力の巧みさを説いている。

このようなホイットマンの詩作世界に見られる〈神秘〉のアポロ的把握と再構成への有島による憧れと、森本が有島とワーズワースの間に、作家としての創作態度におけるアポロ的、つまり直接的に対象を把握するといった美的感覚の類縁性をみてとっている点からは、（しばしば悲劇的な知識人と言われるように、その苦悩に満ちた人生からディオニュソス的な作家としての評価を下されがちな有島ではあるが、）対象の言語化（造型化）に対して有島がアポロ的な志向、つまり、理知的な表現方法を好む（望む）作家であったことを理解することができるであろう。後年の谷川が、「氏の生活においては常に謂はば理性に濾過されたゐた。」⁷⁵として、有島を理性によって対象の〈美〉を把握する人とし、気分の人である志賀直哉とは対極的な人間であるとの判断を下している点は、有島の対象物の〈美〉へのアポロ的な志向性を裏付ける

71 安齋芳「『草の葉』における宗教思想」『ホイットマンの諸相』白鳳社 1999, p. 108.

72 有島武郎「ホイットマンに就て」『有島武郎全集 第八巻』同前, p. 562.

73 有島武郎「芸術についての一考察」『有島武郎全集 第八巻』同前, p. 89.

74 有島武郎「ホイットマンに就て」同前, p. 564.

75 谷川徹三「私の見た志賀さん」『日本人のこころ』岩波書店 1938, p. 247. 初出：『文芸』1936.

一つの証といえる。

これらのことから、ホイットマンにおける「対象の中に〈美〉を求める志向性」と、有島の「対象の中に〈美〉を求める志向性」は、アポロ的なものを追い求めるという意味において共振するものであったと考えることができよう。谷川徹三において、〈芸術〉、つまり〈美〉の世界の中で歳を重ね、人生経験を積み重ねていくというプロセスは、有島とホイットマンに共通する〈美〉に対するアポロ的なパースペクティブを自家薬籠のものとして体得、血肉化していく作業であったともいえる。

一高生であった若き日の谷川は、「彼（＝ホイットマン—執筆者註）の言葉は在来概念を盛るには適せずして彼自身の表象としてのみ意味を持っています。」⁷⁶と切り切る有島のアポロ的な対象への〈美〉を見る眼について、その眼の実体を正確には把握してはいなかったにしろ、そこにホイットマンのアポロ的な対象への審美眼に相通じるものを潜在的に感じ取っていたといえよう。

1979年から刊行された筑摩書房版『有島武郎全集』に収められた有島の日記において、最後の日付となっている1922年9月12日の一節には、

午後より谷川と帝劇に女優劇を見る。成瀬無極の『池』がありし為めなり。悉く面白からず。劇内の空気は全く濁つてしまつてゐる。夜、谷川と又アンナ・パブロバの露国舞踊を見る。無言なのが非常に気持ちが良い。久しぶり全く陶酔の気分ひたる事が出来る。⁷⁷

と、谷川と演劇鑑賞の梯子をしたことが記されている。二人の師弟愛の絆の強さを単純に物語っているものとも考えられようが、それと同時に、有島が谷川に対して、自分と似通った対象への理知的な審美眼が宿っていることを認め、それを開花させる契機を与えるために、有島は谷川を同伴していたと考えることも許されるのではないだろうか。

まとめ

谷川は一高での学生時代、人生の方向性を計りかねて煩悶する生活を送る中で、偶然、ホイットマンの詩集『草の葉』と出会い、ホイットマン詩の生命の息吹を吹き込む力強いリズムに込められた大きな肯定の精神を知ることによって、懊悩たる思いに満ちた生活から解き放たれ、哲学を生業にしていくことを決意する。そして、校友会雑誌に、

⁷⁶ 有島武郎「ホイットマンに就いて」同前、p. 560.

⁷⁷ 有島武郎「最後の日記」『有島武郎全集 第十二巻』筑摩書房 1982、p. 348. ※有島武郎『最後の日記』改訂版 1928、pp. 130-131.

肯定が否定を経なければ、若しくはその肯定の否定が否定せられない限りに於ては、その肯定は真の肯定であり得ないと同時に、否定それ自身は畢竟肯定に至る過程として存在と意義を有するのみでなければならない。

という高らかな宣言によって起筆される「否定・肯定」という名の論文を寄稿している。

この論文は、当時の谷川の心象や置かれていた状況を象徴的に表すものであって、論中において谷川は、ベルクソンの『創造的進化』で展開される否定と肯定の判断の性質の違いにおける〈否定=二次肯定〉という考え方について、

「一である」は一定の表象をもっているが、「一でない」は⁷⁸一定の表象と結びつかない。(略) 一物について何事かを肯定する肯定に対して、それを否定することによって他の何事かを肯定するものである。つまり否定は裏から見れば肯定なのである。ここから出発して、無か一切の反対に位する観念でもなければ、無と一切とが互いに対立する観念でもないこと、無は一切と同じく広くかつ充実した観念であることを説いている⁷⁹

としている。この文章などは、まさに谷川が〈否定〉の精神からの克服に努めた痕跡を物語るに足りるものである。

そして、この谷川がベルクソンの〈否定=二次肯定〉という論理を展開する部分は、有島武郎の実弟・有島生馬が、兄の遺品として保管していたノートの「Bergson 哲学の梗概」と書かれた部分においても、ほぼ同様の内容の記述を見つかることができる⁸⁰ことから、谷川のベルクソン理解、そしてその延長にある〈否定の精神〉の克服の試みは、〈草の葉会〉における有島や学友とのディスカッションの中で練り上げられていったものでもあったと判断することが許されるであろう。

しかしながら、この時点における谷川は、「そんなことで実際に否定の精神を克服することができようはずはなかった。私の中の本能や欲望は論理よりも強かった。」⁸¹と、後年の自身によって打ち明けられているように、ある種の自己陶醉であるディレッタンティズムと表裏一体をなす精神、つまり、ディオニュソス的〈否定の精神〉から抜け出すことは、多くの困難が伴う容易ならざるものであったといえる。

生きる気力を失いそうだった自分を救ってくれたとする、ホイットマンの詩作との一高時代における出会いによってだけでは、ディオニュソス的な〈否定〉の境地を脱することができな

78 谷川徹三「否定・肯定—虚無感、厭世感の地位その他について—」『第一高等学校 校友会雑誌』268号、第一高等学校校友会 1917, p. 2.

79 谷川徹三「私の履歴書」同前, p. 35.

80 安川定男『有島武郎論 [増補版]』明治書院 1978, pp. 345-353. 参照。

81 谷川徹三「私の履歴書」同前, p. 35.

かったという意味において、ホイットマンの詩は、谷川の塞いだ気持ちから元気を回復させる一時的、暫定的な安定剤のようなものに過ぎなかったのである。〈草の葉会〉、それに引き続く京都時代の有島武郎との交流において、ホイットマンと似通った、有島の対象物の〈美〉についての直接的な審美眼を目の当たりにする機会を得たことが、谷川が歳を重ねながら体得していった対象への〈美〉をアポロ的な視点で見る眼を開く端緒として機能していたのである。

谷川が有島との〈草の葉会〉での思い出を振り返る中で、以下のような文章を見つけることができる。

「二十歳前後にうけた感化といふものは一生ついてまわるものかも知れない。」⁸²

このように嘯みしめるようにして、〈草の葉会〉を通した有島からの精神的な感化を谷川が示唆している点は、アポロ的な審美眼を獲得した美術評論家、延いては、ある種の完成をみた人間としての谷川徹三の誕生に有島武郎、そして〈草の葉会〉が、決定的な役割を果たしていることを物語っているといえよう。

谷川が晩年、弟子にあたる詩人・評論家の藤原定との対談の中で、有島や〈草の葉会〉の思い出を述べた後、

ぼくはもうずいぶん以前からだが、古い仏像のもっているあの力と美しさにほとんど無条件にひかれるんだ。そしてそういうものにひかれる気持ちがぼくの心の大きな支えになっているような気がする。ぼくが哲学をやりながら哲学に専念できなくて、芸術のほうへいったということには、そういうじぶんを支えているものが、思想という抽象物であるよりも、芸術作品にあらわれている美の深さや美の高さという、直接こちらの感覚と精神に訴えてくるものだったからのような気がするね。⁸³

と語っていることや、息子の詩人・谷川俊太郎氏が、「父、徹三は哲学の勉強をした人間だが、息子の目から見るとどうも「真・善」よりも「美」のほうが好きだったように思える。」⁸⁴、「父はどちらかと言うと音楽よりも美術の方に熱中するほうだった」⁸⁵と、生前の父を振り返っている点は、まさにこの点を裏付けているといえる。

谷川同様、煩悶の裡に哲学の道を志すことを決めたアメリカの教育哲学者・ジョン・デューイ (John Dewey 1852-1952) が、青年時代に経験した〈神秘体験〉を、「ワーズワースの詩的汎神論」と「ホイットマンの宇宙との一体感」という、ワーズワースとホイットマンの詩作に

82 谷川徹三「有島武郎氏とその周囲」『わが師わが友』武者小路・志賀・三木等・筑摩書房 1942, p. 279.

83 谷川徹三「対談・人間として」同前, p. 324.

84 谷川俊太郎「あとがき」谷川徹三『愛ある眼』同前, p. 232.

85 谷川俊太郎「父に近づく」『思うことあれこれ』第4号, 谷川徹三を勉強する会 2014, p. 52.

におけるアポロ的な概念との出会いに求める⁸⁶ように、谷川徹三にとって、芸術というものに対して「対象への直接的な〈審美眼〉」を所有していた有島武郎との〈草の葉会〉に始まる交流によって受けた感化は、谷川が美術評論家、そして一人の人間として、対象へのアポロ的な審美眼を体得するプロセスの端緒となっているという意味において、デューイにおけるワーズワースとホイットマンの詩から受けた〈神秘体験〉に匹敵するものであったといえるのではないだろうか。

【付記】本論考は、2009年8月22日に開催された愛知教育大学哲学研究発表会・夏季例会における執筆者の研究報告「谷川徹三における「草の葉」会の役割—有島武郎との関係をめぐって—」の発表原稿をもとに、大幅に修正、加筆を施したものである。

キーワード：谷川徹三、有島武郎、草の葉会、ウォルト・ホイットマン、審美眼

⁸⁶ 小柳正司「デューイの教育哲学の形成と原理(7)」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』第45号、1994、p. 240. 参照。

Abstract

Transmission of the eye for the Beauty from Arishima Takeo to Tanigawa Tetsuzo

SUGIBUCHI YOICHI

With a large contribution in his outstanding career, Tanigawa Tetsuzo (1895–1989), born in Tokoname city (Aichi), is certainly one of the well-known philosophers in Japan. After graduated from the Fifth junior higher school of Aichi prefecture at Nagoya, he entered, in 1913, the First higher school of Japan in Tokyo. Studying in this institution, he join, with interests in Walt Whitman's poems, in the Society of Leaves of grass (*Kusanohakai*), founded by Arishima Takeo (1878–1923) and five students of the First higher school in 1917. Tanigawa became immediately a keen member of this society and then one of the disciples of Arishima.

After the suicide of Arishima in 1923, Tanigawa had become not only philosopher but also specialist on the artistic domains like art history, fine art, aesthetics, pottery, cinema, antique etc. In later years, Tanigawa said that he had studied his eye for the beauty via Arishima's apollonian viewpoint.

Therefore, in this paper, I analyze, in detail, the friendship between Tanigawa and Arishima and, considering their artistic works, disclose the process of transmission of the sense of value for the beauty from Arishima to Tanigawa.

Keywords: Tanigawa Tetsuzo, Arishima Takeo, Leaves of grass, Walt Whitman, Aesthetics